

## 第10回 新潟気分障害研究会

医療法人水明会佐潟荘 医局

平成29年7月25日、第10回 新潟気分障害研究会（場所：新潟グランドホテル、共催：新潟気分障害研究会、アツヴィ合同会社）に参加しました。特別講演は、独立行政法人国立病院機構 肥前精神医療センター精神科医長 本村啓介先生による「うつ病論再考—複数の歴史のなかで」でした。印象に残ったのは、現在に至る精神科診断学へのアドルフ・マイヤー（英: Adolf Meyer、1866年9月13日–1950年3月17日、元ジョーンズ・ホプキンス大学精神科教授、元アメリカ精神医学会会長）の貢献を再認識させていただいたことです。

マイヤーはチューリッヒ近郊に生まれた神父の息子で、神経病理学で学位を取ったり、渡米してからも比較神経解剖学を研究したりするなど、最初はおっぱら生物学的な精神医学者でしたが、その後は素質（遺伝）に対する環境の影響、両者の循環的な相互作用を重視しました。「精神症状の多くを外界の刺激に対する反応として考えた」と単純に理解された嫌いがありましたが、本村先生の講義から、彼の精神生物学に基づく精神疾患の理解には、より深い洞察が含まれていたようです。マイヤーの下には日本からも石田昇が留学し、彼の精神衛生運動への関心は受け持ち患者ビアーズの著書『わが魂に出会うまで』に触れてとのことです（小俣和一郎『精神医学史人名辞典』より）。

講演の一つの結論としては、（操作的）診断と症例の定式化（ケースフォーミュレーション、マイヤーの言うところでのライフチャート）の両方の意義や限界を理解した上での、丁寧な運用が大切ということでした。